
【企画】カッコいい戦闘シーンを書く練習

参加者一同

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【企画】カッコいい戦闘シーンを書く練習

【Nコード】

N5037U

【作者名】

参加者一同

【あらすじ】

なぜ、カッコいい戦闘シーンが書けないのか？

その疑問と真摯に向き合い、自分なりに練習と考察を重ねていく！ という企画です。

どうぞ戦闘シーンが苦手な方、十八番の方、向上心豊かな方、老若男女・一次、二次問わず、誰でもいらっしゃいます。

覚書（前書き）

質問いただくたびに、説明をちよつとずつ付け足しております。

覚書

なぜ、私にはカッコいい戦闘シーンが書けないのか？

この疑問を解消すべく、自分の書いた戦闘シーンについて練習と考察を重ねていこう、というのが、この企画の狙いです。

途中参戦OK！

ジャンル＆一次、二次問いません！　なぜなら私が二次作者だから（笑）。

ただし、二次作者さんは誰が読んでも内容を楽しめるよう、状況や攻撃方法を描写し、『技名だけで話を進める』というのは無しでお願いします。

この企画はあくまで『戦闘シーンを通してキャラを描く』ことが目的であるので、

現在、書き進めている小説の続き　その戦闘描写の下書きや、既に書き終わった小説を改良するための原稿、ぱっと思いついたから書いてみただけの練習作など、

その作者さんの直接役立つような内容についてしっかり議論し、その段階を追って投稿していきます。

連載小説の続きもOKなのは、更新スピードをなるべく落としたくない企画主、との。のちよこざいな作戦です（笑）。

具体例で言うと、

各章　作者名：　　　　　作品名：

第一話（第一稿目）　　　誰の指摘もなし。

（まえがきに登場キャラの簡単な説明、戦う状況を。あとがきに作者の狙いや感想、反省を書きます。一言でOK。また、短編などの一話完結作品であれば、まえがき不要）

第二話（第二稿目） 指摘を受け、改稿してみたもの。

（まえがきに他の方から頂いた指摘内容を。あとがきにその指摘を受けた作者の意気込みを書きます）

第三話（第三稿目） さらに指摘を受け、改稿してみたもの。
（これがあるかどうかはその人によります）

と言う感じで、この『かつこいい戦闘シーンを書く練習』という表題に投稿して行きます。

この形式を選んだ理由は、改稿経過を知ることと読み手側も「ああ！なるほど、これを気をつけるところなのか！」とか、「この成長には、こういう気配りが必要なんだな」っていうのを一緒に学べるんじゃないかな？と期待しているからです。

さらに指摘主を明確にすることで、皆さんが「ぜひ、この人に私も指摘されたい！」と思うような作者さんとの出会いがあるかもしれない！（ただし、その方がお忙しい場合は涙を飲んで諦めましょう。企画主ならいつでも使ってくれて構いません）

最終目標はもちろん、戦闘シーンを切り取っただけなのに、それを通して作品が^{キャラ}掴めてしまう内容を描くこと！です。

特に「このキャラはこういう性格だから、こういう攻撃はしないんじゃない？」とか、「このキャラならこう攻めて、敵を誘導する！」といった話をメインに、どんどん意見交換していきたいですね！

ちなみにこの企画では相互感想を感想欄でなくメッセージでやりとりします。

なぜなら、細かい指摘部分を指摘してくれた主さんに聞き返しやすいためです。

やはり改稿するとき、自分の欠点に対する情報を正確に掴めた方がやりやすいですからね。

さて。こんな説明で大丈夫でしょうか？

簡単に言くと、『戦闘シーン』だけを切り取って相互感想をメッセージでやる、という企画です。

その他不明な点があれば、との。までお問い合わせください。

参加者は随時募集しております。

勿論、企画参加とまでは行かずとも、投稿した話の内容に対する感想や指摘をくださる方も募集しております！ その場合は感想欄にて、作品名と作者さんの名前を明記するよう、お願いします。

5

この企画では、感想・指摘について甘口・辛口を問いません！（ただ、辛口だと心が折れそう……という参加者さんは、との。にその旨を教えてください、各章の作品名の後ろに【辛口感想厳禁】という注釈を私が入れておきます）

スキルアップのために皆さん、ぜひとも率直な意見をお願いしますね。

！
それでは、目指せ！ 人間味溢れる『カッコいい』戦闘シーン！

覚書（後書き）

ちなみに、企画自体は一次・二次問わず進めて行きますが、企画主はセンター・オブ・チキンなので一次作品と二次作品は別々の小説として投下していきます。

第一稿目

銀の静寂がドームに広がっていた。

壁に囲まれた十平方メートルほどの正八面の空間。天井は抜けるように高い。構成素材は壁、床、天井、いずれも堅牢な特殊鋼で造られており、RPGなどロケットランチャーの直撃にさえ耐えるものだ。

乾いた静寂を微かに破る異音が二つ、響く。

イイイイイイイイイイ

天井のライトがそれを強く照らす。十センチ程の黒い何かが空間のそれぞれ両端に不規則な楕円を描きながら飛び回っている。その羽音から生み出される歪んだ軌跡は誰にも予測は出来ないだろう。

『テストパターンバージョンスリー、ビートル1とスタッグ2の戦闘テストを開始する』

壁に内蔵されたスピーカーから聞こえるその声に、感情は無かった。ただ観測者としての存在のみを、その声から読み取ることしか出来ない。

バイオテクノロジーの急速な発展は、生物進化における、進化の系統樹の先頭、霊長類と肩を並べる進化のもう一つの頂点、「昆虫」を兵器とする技術へと変化を遂げようとしていた。

遺伝子レベルの改造による超高密度筋肉、重金属を含む強靱な外殻、神経系の電子改造による指向性をもつ知性化、大別されるこれら三つの技術により昆虫は本来の姿のまま、殺戮の兵器へと存在をシフトしていく。

この閉鎖空間はその過度期における技術実証の場 いわゆるコロシウム なのだ。

俺は、決闘「たたか」う、戦闘「たたか」う、死闘「たたか」う、生存「たたか」う

カブトムシ型の試験型戦闘甲虫、ビートル1は思考する。

『カウント、1、2、3、スタート』

無機質な声が、人工の生存闘争の幕を開ける。

イイイイ イイイイ イイイイ イイイイ イイ

羽音が急激に拡大、ビートル1とスタッグ2の姿が一瞬で掻き消えた。爆発的に発生したソニックウェーブが縦横無尽に壁を殴打、散らばっていく。強化筋繊維によって動く羽は戦闘甲虫の体を音速へと加速させる。

加速する二匹はおよそ人間の動体視力では見えぬ速さで、歪む楕円軌道を描いていく。やがて、二つの楕円が収束しながら、その互いの距離を縮めていった。

俺は、ヤツを倒す。戦って、ヤツを倒す。それが俺の存在の証明だ。

本来、戦闘甲虫の知性は指向性を持たせるためであり、レベル的には犬程度が普通だ。このビートル1のような明確な自我を持つタ

イプは開発者から見れば、計算外の存在だろう。
もっともその自我の存在に気づいていればだが。

猛スピードで収束する楕円、やがて空中で派手な火花が、開花する花のように舞う。

音速の二匹がすれ違い様にぶつけ合う重金属を含む外殻が、散っているのだ。

そろそろ、か。

ビートル1の意志がより研ぎ澄まされる。本来、ビートル1は強攻偵察兼対人戦闘型が開発目的であり、その角を生かした軍用ライフルの初速を上回る突進が最大の武器だ。

軌道の急激に変える。へんの字の軌跡を描き、スタッグ2の頭部正面へひたすらに飛ぶ、跳ぶ、加速「と」ぶ。

殺った！

しかし、スタッグ2の体が一瞬、消える。

がっ！

ビートル1は左側の衝撃を感じた。

……やられたか。

左側の足二本が切断されている。突進を利用したすれ違いからのカウンターで喰らったのだ。

目前を、スタッグ2が飛ぶ。黒光りする曲線を描く顎に、ビートル1の足が一本くわえられていた。

ガチリ

閉じるアゴ、二つに千切れた足が、宙へ墜ちていく。

クワガタムシを基本体とするスタッグ2の開発目的は強攻偵察兼施設破壊。強化されたアゴによる切断は、鉄骨さえ易々と破壊する。あくまで人を対象としたビートル1の攻撃力を遥かに凌ぐのだ。

ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、

音速の羽音と共に、牙の調べが鳴り響く。

スタッグ2は飢えているのだ。闘争本能を満たす存在に。

オオオオオッ！

ビートル1は加速する。例え致命的なカウンターを取られようと彼には突進以外に武器は無い。そして、闘う以外に生き方は無い。

もし、ビートル1に喉があつたなら彼は叫んだだろう。

恐怖ではなく、命を懸けて闘うこの高揚に。

この高ぶりを感じる場所が、人でいう魂の部分だという事を、ビートル1はまだ知らない。

寸前まで接近する二匹、発生する衝撃波がドームを駆け抜ける。

がっ！

またしてもカウンターを取られるビートル1、今度は右足を一本。

間髪入れず、スタッグ2の追撃。オオバサミがビートル1の胴を挟み込む。

ちいっ！

完全な詰め、ギリギリとアゴがビートル1の胴を締め付けていく。強靱な外殻も、この状態ではしばらくも持たない。

だったらっ！

まだ自由に動く羽を最大限に動かす。全速力で後退する。

これだ、これが……

ビートル1は思い出す。

試験後、褒美代わりに与えられる魚肉製の高蛋白ソーセージを食べている最中も彼の心は満たされることは無かった。

闘いが終わり、移されたケージの中でも安らぎこそすれ、満たされるものは睡眠欲だけだ。

闘いが、命をかけた明日を捨て今日を生きる闘いだけが、ビートル1の捕らわれた日々を開放していく。

人はそれを「自由」と呼ぶことを、ビートル1はまだ知らなかった。

ビートル1の頭部の角にはある改造が施してある。基部にスプリングを仕込み、遺伝子操作により体内で作りだした生体火薬で角を突き刺す、いわば生体パイルバンカーとも呼べる機構だ。

本来、すくい上げるのが目的であるカブトムシの角だが、ビートル1の加速とともに放たれる生体パイルバンカーは名実ともに超音速の槍と化す。

これを使う！

ビートル1はスタッグ2に挟まれたまま、回転をかける。スタッグ2もその動きに反応、羽を操作し、加速を増す。

グルグルとコマのように宙を回り続ける二匹、しかしいくら遠心力をかけようとスタッグ2のアゴはビートル1からは一向に外れない。

これでいい……

ビートル1は頭部の生体パイルバンカーを起動、誰もいない頭上へ撃ち放つ。スタッグ2の噛みついていいる場所は腹部であり、頭部についている角では届きさえしない。

当たり前だ、ビートル1の目的は、角でスタッグ2を突き刺す事ではない。

バズンツという生体火薬による破裂音、発生する強力な反動が二匹の回転を大きく崩す。不自然なモーメントがビートル1の延びきった角を根元からへし折る。

当たれえッ！

崩れた回転を引きつけながら、ビートル1はスタッグ2を振り回す。歪な回転のまま、壁際へ移動。

回転の勢いを利用し、スタッグ2を横殴りに壁へ叩きつけた。グシヤリという異音、スタッグ2の体があっけなく、砕けて散らばる。いかに強靭な戦闘甲虫の外殻でも、二匹分の推力とパイルバンカーの反動でまともに壁に叩きつけられては保たなかったのだ。

……勝った。

床へ墜ちていくスタッグの破片を見つめながら、ビートル1は生存を噛み締める。

六本の内、三本の足を失い、角さえへし折れた、もはやビートル1はカブトムシという形すらしていない。

それでも、ビートル1は勝利し「生きてい」た。

ぐおっ!?

腹部に激痛、見るとスタッグ2の頭部がまだ噛みついている。それどころか、ギリギリと締め付けていく。

スタッグ2もまた、闘争本能のままに闘いを止めることはない。死に瀕する状態にあっても、だ。

ビートル1の体が天井を目指すように上昇していく。

逃げる気は無い。そもそもそんな場所はない。ただ、終われるなら一番高い場所がいいと、ビートル1がなんとなく考えたからだ。

ミジリというねじられる感触の音、バツリという切断の響き、スタッグ2のアゴによって切断されたビートル1の頭部がゆらゆらと揺れて床へ墜ちていく。

ビートル1、彼が最後に見た光景は、銀色に光輝く天井へ自らの胴体のみが雄々しく羽を広げ飛んでいく姿だった。

予想外の結果だな。

ええ、まさか勝率5%以下のビートル1が引き分けるとは。

実質はスタッグ2のデモンストレーションなはずだったんだ

がな。

しかし、ビートル1がデータに無い攻撃を自ら考えて繰り出すだなんて…… 実に興味深い。

ただのバグだ。こんなものは商品にならん。

だったら、もらっていきましよう。

……はっ？

私の請け負っている次世代兵士武装実験計画。通称、仮面「マスクド」ライダープランの中核を成す「ベルトシステム」その試作機の中核AIにこのビートル1の頭脳を使います。

正気か君は！？

これぐらいクレバーな闘争本能が無ければ、ライダーは作れませんよ。

ビートル1の戦いはまだ終わらない。

第一稿目（後書き）

・作者の狙いと感想

話の思い付きのイメージとしては

幾つもの同朋との戦いを生き抜いた実験戦闘甲虫ビートル1、彼の最期の闘いは最新戦闘甲虫スタッグ2との性能実験の生け贄という勝ち目の無い闘いだっただけ……

という感じでした。

ビートルとスタッグの対比が狙いです。

・反省点

話の裏テーマとしては『「自我」ってなんだ？』

というもので、自我を持っていると第三者が確認するにはコミュニケーションを取らねばならない、しかし、コミュニケーションを取れない、期待されない物に報われない孤独な自我があったとしたら？

高度な演算能力と本能が合わさる時、果たして「自我」はどこから生まれるのか？

とかあったんですが、やはり読み直してみると上手く書けてませんね。

第二稿目（前書き）

（との。評）基本的に「読みながらその時々感想を書く」スタイルです。

まず戦ってるのが【虫】ということで、ぐぐつと興味を引きつけられました！

『仮面ライダー』という単語を聞いていたので、てっきり人型が戦うのかと思ったら完全に虫だ！！　みたいな。

確かに確かに！　外殻に金属やら触角に電気端末やらつきこんだらすつごく強そう……！　というのが第一印象。

情景描写も素晴らしく、爆発したときの光景などしっかりと頭に浮かんで来ました。

それと、最初の『正八面の空間』は、『正八角柱の空間』のことですね。

> 本来、戦闘甲虫の知性は指向性を持たせるためであり、レベル的には犬程度が普通だ。

> このビートル1のような明確な自我を持つタイプは開発者から見れば、計算外の存在だろう。

戦闘甲虫の知能は犬程度で、ビートル1には【自我】がある、ということとはビートル1は脳皮質が発達してより人間に近い思考をする、ってことだな。と一人納得しました。

特に、ビートル1の『そろそろだな』などの台詞（？）も人間らしいですし、ここで、ビートル1（知能・人間）vs スラッグ2（知能・犬）と定義づけられています（私の中で）。

しかし、先にカウンター成功したのはスラッグ2。

「んん！？　知能・犬のくせに強いな！　コイツ！」

と思いながら読み進めていき　（実際、野性化してる犬相手なら私は負ける自信ありますし（笑））

淡々としているスラッグ2のカウンター攻撃がいかにも『プロゲラム』っぽくて良いです！

それに引き換え、ビートル1は人間思考の闘い方のなかでも、自己啓発型の思考回路の持ち主なんだなって、この戦闘から読み取れました。

特に、最後の自分の身を犠牲にした命がけの勝負、ビートル1の「生きたい」って願いが込められているのが深かったです！　なにより、

> スタッグ2もまた、闘争本能のままに闘いを止めることはない。死に瀕する状態にあっても、だ。

これがね。グッと来ました。

やっぱりただのプログラムだけじゃなく、こういう闘争本能の高さがいかにも虫っぽい！　と思ったんです。

しかし、最後がどうも分からない。

>　予想外の結果だな。

>　ええ、まさか勝率5%以下のビートル1が引き分けるとは。

ん？　5%？

身体強化がスラッグ2と違ってビートル1は甘かった、ってことでしょうか。

でも確かに、スペックが低いのだとすれば頷けますね。次のセリフ。

> 私の請け負っている次世代兵士武装実験計画。通称、仮面「マスクド」ライダープランの中核を成す「ベルトシステム」その試作機の中核AIにこのビートル1の頭脳を使います。

たぶん、身体強化よりも知能を上げる方が技術的に難しいでしょう。

というより、『知能を上げる』『コンピュータの処理速度を上げる、という研究者たちの発想では、ビートル1を再び創ることは難しいですね。スラッグ2が犬で、ビートル1が人なら持つてくるキャパシティが全然違うことになりますから。

と、

最後まで読むとスラッグ2とビートル1の違いが、【自我の有無】だけでなく、スラッグ2は最新型だから、思考速度・身体強化にも差があったんだろう、という結論に至りました。

しかしそうすると、最初に「犬」と「人」という印象を与えられるだけでなく、もっと『「旧型」と「新型」のプログラム差処理スピードが全然違う』というスペック差も出した方が、よりプログラムで動くスラッグ2と、自我で考え、自分に最も合った動きを取るビートル1の差が出せたんじゃないかな？ と思います。

第二稿目

ビートル1のテスト回数が十回を超えました。機能の低下にさしかかることを考えると、まともに戦闘テストが出来るのは次の一回が最後でしょう。

そうか、ならば最後の相手は最新型のスタッグ2だ。

スタッグ2ですか、最新型戦闘甲虫となると、防御性以外性能の低い前期型のビートル1の勝率は5%以下、まともな実戦テストにはならないのでは？

構わんさ、所詮は使い捨ての実験兵器だ。スタッグ2の性能を試す仮の練習台でいい。

……そうですか。

粛々とした銀の静寂がドームに広がっていた。

壁に囲まれた十平方メートルほどの、真上から見て正八角形の空間。天井は抜けるようにひたすらに高い。構成素材は壁、床、天井、いずれも堅牢な特殊鋼で造られており、RPGなどロケットランチャーの直撃にさえ耐える物だ。

乾いた静寂を微かに破る異音が二つ、響く。

イイイイイイイイイイ

天井のライトがそれを強く照らす。十センチ程の黒い何かが空間のそれぞれ両端に不規則な楕円を描きながら飛び回っている。その羽音から生み出される歪んだ軌跡は誰にも予測は出来ないだろう。

『テストパターンバージョンスリー、ビートル1とスタッグ2の戦

闘テストを開始する』

壁に内蔵されたスピーカーから聞こえるその声に、感情は無かった。ただ観測者としての存在のみを、その声から読み取ることしか出来ない。

バイオテクノロジーの急速な発展は、生物進化における、進化の系統樹の先頭、霊長類と肩を並べる進化のもう一つの頂点、「昆虫」を兵器とする技術へと変化を遂げようとしていた。

遺伝子レベルの改造による超高密度筋肉、重金属を含む強靱な外殻、神経系の電子改造による指向性をもつ知性化、大別されるこれら三つの技術により昆虫は本来の姿のまま、殺戮の兵器へと存在をシフトしていく。

この閉鎖空間はその過渡期における技術実証の場
ロシアン なのだ。 いわゆるコ

……俺は、決闘「たたか」う、戦闘「たたか」う、死闘「たたか」う、生存「たたか」う

カブトムシ型の試験型戦闘甲虫、その戦闘知生体ビートル1は思考する。

『カウント、1、2、3、スタート』

無機質な声が、人工の生存闘争の幕を開けた。

イイイイイイイイイイイイイイイイ

羽音が急激に拡大、ビートル1とスタッグ2の姿が一瞬で掻き消えた。爆発的に発生したソックウェーブが縦横無尽に壁を殴打、散らばっていく。超強化筋繊維によって力強く動く羽は戦闘甲虫の体を容易に音速へと加速させる。

ひたすらに加速する二匹はおよそ人間の動体視力では見えぬ速さで、歪む楕円軌道を描いていく。
やがて、二つの楕円が収束しながら、その互いの距離を縮めていった。

俺は、ヤツを倒す。戦って、ヤツを倒す。それが俺の存在の証明だ。

本来、戦闘甲虫の知性は指向性を持たせるためであり、レベル的には犬程度が普通だ。このビートル1のような明確な自我を持つタイプは開発者から見れば、余りにも計算外が存在だろう。
もっともその自我の存在に気づいていればだが。

猛スピードで収束する楕円、やがて空中で派手な火花が、開花する花のように舞う。

音速の二匹がすれ違い様にぶつけ合う重金属を含む強化外殻が、削れて散っているのだ。

そろそろ、か。

ビートル1の意志がより研ぎ澄まされる。本来、ビートル1は強攻偵察兼対人戦闘型が開発目的であり、その角を生かした軍用ライフルの初速を上回る突進が最大の武器だ。

軌道の急激に変える。への字の軌跡を描き、スタッグ2の頭部正面へひたすらに飛ぶ、跳ぶ、加速」と「ぶ。

殺った！

しかし、スタッグ2の体が一瞬、消える。

がっ！

ビートル1は左側の衝撃を感じた。

……やられたか。

左側の足二本が切断されている。突進を利用したすれ違いからのカウンターを喰らった。

後期型のスタッグ2の戦闘知性の方が、演算能力に優れているからだ。ビートル1の軌道を読み、理想的なカウンターを仕掛けられる。

目前を、スタッグ2が悠々と飛ぶ。黒光りする曲線を描く顎に、ビートル1の足が一本くわえられていた。

ガチリ、

閉じるアゴ、二つに千切れた足が、宙へ墜ちていく。

クワガタムシを基本体とするスタッグ2の開発目的は強攻偵察兼施設破壊。強化されたアゴによる切断は、細い鉄骨さえ易々と破壊する。あくまで人を対象としたビートル1の攻撃力を遥かに凌ぐ代物だ。

完全な詰め、ギリギリと締まるアゴがビートル1の胸を締め付けていく。

強靱な外殻も、この状態ではしばらくも持たない。

だったらっ！

まだ自由に動く羽を最大限に動かす。全速力で後退する。

これだ、これが……

ビートル1は思い出す。

試験後、褒美代わりに与えられる魚肉製の高蛋白ソーセージを食べている最中も彼の心は満たされることは無かった。

闘いが終わり、移されたケージの中でも安らぎこそすれ、満たされるものは睡眠欲だけだ。

戦い以外のコミュニケーションは知らない。生死以外の意味は知らない。知る必要は無い。彼は孤独の意味さえ知らない、真の意味の孤独者だ。

それゆえに闘いが、命をかけた明日を捨て今日を生きる闘いだけが、ビートル1の捕らわれた日々を開放していく。

人がそれを「自由」と呼ぶことを、ビートル1はまだ知らなかった。

ビートル1の頭部の角にはある改造が施してある。基部にスプリングを仕込み、遺伝子操作により体内で作りだした生体火薬で急激に押し出した角を突き刺す、いわば生体パイルバンカーとも呼べる機構だ。

本来、すくい上げるのが目的であるカブトムシの角だが、ビートル

ル1の加速とともに放たれる生体パイルバンカーは名実ともに超音速の槍と化す。

これを使う！

ビートル1はスタッグ2に挟まれたまま、回転をかける。スタッグ2もその動きに反応、羽を操作し、加速を増す。

グルグルとコマのように宙を回り続ける二匹、しかしいくら遠心力をかけようとスタッグ2のアゴはビートル1からは一向に外れない。

これでいい……

ビートル1は頭部の生体パイルバンカーを起動、誰もいない頭上、虚空へ撃ち放つ。スタッグ2の噛みついてしている場所は腹部であり、頭部についている角では届きさえしない。

当たり前だ、ビートル1の目的は、角でスタッグ2を突き刺す事ではない。

バズンツという生体火薬による破裂音、押し出される角から発生する強力な反動が二匹の回転を大きく崩す。不自然なモーメントがビートル1の延びきった角を根元からへし折る。

当たれえッ！

崩れた回転を引きつけながら、ビートル1はスタッグ2を振り回す。歪な回転のまま、壁際へ移動。

回転の勢いを利用し、スタッグ2を横殴りに壁へ叩きつけた。グシヤリという異音、スタッグ2の体があっけなく、砕けて散らばる。いかに強靭な戦闘甲虫の外殻でも、二匹分の推力とパイルバンカーの反動でまともに壁に叩きつけられては保たなかったのだ。

……勝った。

床へ墜ちていくスタッグの破片を見つめながら、ビートル1は生存を噛み締める。

六本の内、三本の足を失い、角さえへし折れた、もはやビートル1はカブトムシという形すらしていない。叩きつけた衝撃は、ビートル1の内部も確実に傷めつけていた。

それでも、ビートル1は勝利し「生きてい」た。

ぐおっ!?

腹部に激痛、見るとスタッグ2の頭部がまだ噛みついている。それどころか、ギリギリと締め付けていく。

スタッグ2もまた、闘争本能のままに闘いを止めることはない。死に瀕する状態にあっても、だ。

ビートル1の体が天井を目指すように上昇していく。

逃げる気は無い。そもそもそんな場所はない。

ただ、これで終われるなら一番高い場所、満天の星空の近くがいいと、ビートル1が考えたからだ。

研究室の中しか知らないビートル1が、なぜ星空を思い浮かべたのか、それはビートル1自身にもわからなかった。

本能が囁いたのか、魂の彼方から流れ出た叫びなのか、それを知るものはいない。

ミジリというねじられる感触の音、バツリという切断の響き、スタッグ2のアゴによって切断されたビートル1の頭部がゆらゆらと揺れて床へ墜ちていく。

ビートル1、彼が最後に見た光景は、銀色に光輝く天井へ自らの胴体のみが雄々しく羽を広げ、誇り高く飛んでいく姿だった。

予想外の結果だな。

ええ、まさか勝率5%以下のビートル1が引き分けるとは。実質はスタッグ2のデモンストレーションなはずだったんだがな。

しかし、ビートル1がデータに無い攻撃を自ら考えて繰り出すだなんて…… 実に興味深い。

ただのバグだ。こんなものは商品にならん。

だったら、もらっていきましよう。

……はっ？

私の請け負っている次世代兵士武装実験計画。通称、仮面「マスクド」ライダープランの中核を成す「ベルトシステム」その試作機の中核AIにこのビートル1の頭脳を使います。

正気か君は！？

これぐらいクレバーな闘争本能が無ければ、ライダーは作れませんよ。

ビートル1の戦いはまだ終わらない。

第二稿目（後書き）

・作者からの一言

改稿では、指摘されたフィールドの部分や性能差などの説明部分を足してあります。（との。評より）

あとは余談ですが自我について、

本能を核とし、知能が合わさる所に「自我」があるというのは正直自分のそうあってほしいという理想というか、都合のいい妄想です。

昆虫類を観察していくとわかりますが、本能とは生存活動のためのいわばプログラム、自動的な行動に近いものです。

本能を骨に、知能を肉に自我が発生するなら、自我とは生存プログラムの一端にすぎないのではないか？ ならば、我々が自我と呼ぶものは生存本能の有利な機能の一部であり、自分には絶対な自我があると思うのは実は浅はかな思い込みに過ぎないのではないか？ ということなんぞまあ自分の頭ではいくら考えてもまともな答えなんぞではさすがないので、この話では表のテーマにはできなかったのですW

第一稿目

燃え盛る炎、舐め尽くす熱。散華した瓦礫の中で俺は目覚めた。爆発のせいで、ビルの一室の窓ガラスは全て割れ、夜の街の明かりが陽炎を纏い揺れている。

ここは……ぐっ！

両足に走る電撃のような激痛、朱にまみれた、辛うじてまだ脚の形を残す二本の肉が俺の下半身にくっついていた。

これじゃ、もう空手は無理か……

うすらぼんやりとそんな事を考える。冷静に考えれば脚どころか、命さえわからないのだが。

「飛田！ 生きているか！」

声と共に俺を担ぎ上げる人影、メガネをかけた瘦身の男。

「小木……か？」

朦朧とする意識の中、俺は十年來の親友であり、優秀な科学者でもある男、小木の名を呟く。

「しっかりしろ！ こんな所で死なれちゃ困るんだ。お前、にはこのマスクドライバープラン一号機を着けて……もらわなくちゃ……ならないんだからな」

小木の片手には小さな銀のアタッシューケースがあった。

「ああ、わかってるぜ。約束だからな……おい！ 小木！」

小木の横腹に血のシミが大きく広がっていく。明らかな銃創だ。

「……へっ、どうってこたあない。それより早く逃げ……」

黒い一団が俺と小木に立ちふさがる。装甲服とガスマスクを付けた死の獵犬共だ。

こいつらっ！

「飛田、お前は逃げる！」

アタッシューケースを握らせ、小木が俺を窓から投げ放つ。

「小木イイツ！」

「生きる飛田アッ！　そしてお前が、お前がステーキになるんだあッ！」

ビルから落ち行く俺が聞いた音は、友を貫く銃声。

俺が見た光景は舞い散る友の血霧。

そして俺が抱きしめた物は復讐のための牙。

二年後

関東地方都市、〇市郊外

叩きつけるような足音が路地裏の壁を叩く。

それは逃げていた。生存本能のため、恐怖のため、ただ街の片隅を逃げ続けていた。

よたつきながらも、その跳躍のような移動は人の速度を越えている。

ゴミ箱を踏み砕き、生ゴミをぶちまける。邪魔なスナックの古看板を真つ二つに切断、払いのけた。

恥も外分も 隠密性も機密性もない、全てをかなぐり捨てた逃走。それほどまでにそれは焦っていた。

「おい、待てよ」

雑居ビルの間、突如現れた前方の人影にその足が止まる。

「ずいぶん怯えてんなあ……化け物の分際で人間らしくよお」

蒸し暑い夜に似合う、Ｔシャツとジーンズのラフな格好の青年

飛田 直人 は冷酷な、獰猛な笑いを浮かべた。

ビル街のネオンに、その姿が照らされる。

ニメートルを超える背丈と細長いシルエット。逆正三角形の頭部。鎌状に延びる、高周波振動を利用した切断能力を持つ両腕。重金属を含むエメラルド色の生体装甲。

カマキリの擬人化の失敗作としか表現出来ない外見。中途半端に人間に近い様が嫌悪感をより引き立てる。

「オマエハ……ナンダ!? ナゼワレラ『クーゲルシュライバー』
ネラウ!」

その声は辛うじて人の言葉を話した。

「『なぜ』か……?」

飛田の掲げられた右手には二十センチ程の筒状の物体。対物ライフルの弾丸のような物があった。

「決まってるだろ……『復讐』だ!」

ビルからの落下から目覚めた時、飛田の前に一人の男がいた。

「おやおや、もう目覚めましたか。お丈夫ですねえ」

ニヤニヤと全てを嘲笑うように、笑顔を浮かべるその男は小木の協力者の二荒と名乗った。

飛田の脚はすでにサイバネティクス手術により機械の義足が取り付けられている。マスクライダー一号機のセッティングも飛田用に済ませているという。まるで悪魔の如き手の回し用。

「さて、お膳立てはすみみましたので、肝心のあなたはいかがなさいますか?」

イヤミのように皮肉気に二荒が問う。飛田は迷う事無く、復讐を選んだ。

「出番だ、ビートル1ツ！ 貫くぜ！」

めくり上げたTシャツの下にベルトのバックルが覗く。電子的紋様で刻まれるレリーフは、抽象化されたカブトムシの姿。

勢いよく、手に持つ筒 チヂリウム起爆用小型パイルバンカーを装着する。

カチリという小さな響きの後に、巨大な破裂音が唸る。濃縮チヂリウムの活性化した青い燐光が飛田を包み込む。

『チヂリウムエナジー制御、装甲展開開始』

ビートル1の音声 精神疲労を和らげやすいとされる柔らかな女性の声 が告げる。

光に包まれた飛田、その身が装甲に覆われていく。

光が晴れたその中に立っていた者は、黒い装甲に、血脈の様に引かれる赤のライン。額には、甲虫を想起させる小型の角。複眼状の正六角型パターンの入ったゴーグル。

夜の街に、復讐の魔人が現れる。

「キイヤッ！！」

咆哮を上げ、カマキリの怪人が両手を振るう。空中を不可視の斬撃波が疾駆する。

「セイツッ！」

それよりも速く、魔人は地を蹴る。斬撃波は魔人のいた背後の壁を切り裂くだけだ。

「ビートル1、ファイナルドライブセット、レディ！」

『チャージはもうやっている！ カウント、ワン！』

路地裏の狭い夜空に魔人が高く舞う。鈍く輝く三日月を背に、カマキリ目掛け落下。ベルトから左膝へ、青白い光が血液のように集っていく。

「気が効くなお前は！」

『集中しろ飛田、ツー！』

神の鉄槌の如く、左膝頭がカマキリの頭部に叩きつけられた刹那、

『スリー！ イグニッション！』

「ファイナルステークツッ！」

左膝が爆発音と共に眩い光を放つ。膝頭内部から、義足の膝部の内部骨格である金属支柱　パイルバンカー　が撃ち出された。魔人の持つ最強の牙は瞬く間にカマキリの頭部を貫き、吹き飛ばしていく。

その直後、カマキリ体内の証拠抹消機能　つまり自爆装置が起動した。

「けっ、毎度派手に吹っ飛びやがる」

『出なければ証拠抹消機能の意味が無い』

爆発の中、無傷の魔人が立ち尽くす。

「俺が『何か』か、冥土の土産に教えてやるよカマキリ野郎」

それは、貫く者。それは、復讐者。それは挑戦者。汝、その名は、

「仮面ライダー ステークだ」

飛田 直人とビートル1の戦いはここから始まる。

第一稿目（後書き）

・作者の狙いと感想

深夜テンションで書いたもので、「もつと読みたい!」と思ってもらえりゃ狙い通りです。続きは……無理かなW

とりあえず戦闘描写については特に不足無く伝わったようだと安心しました。（企画主の感想を受けて）

複雑な動きとかさせてと「これ読む人にちゃんと伝わるかな?」とスゴい不安ですからW

第二稿目（前書き）

（との。評）

今回はあれですね。

すごくヒーローものって感じがします！

『復讐』を掲げる飛田さんですが、あまり『憎悪』の感情には捕われていないようですし、どこかカラリと爽やかな、熱い男を見せつけた気がしました！

以下はちょっとだけ、読んでいる間に思ったことです。

>「しっかりしろ！ こんな所で死なれちゃ困るんだ。お前、にはこのマスクドライダープラン一号機を着けて……もらわなくちゃ……ならないんだからな」

この小木さんが弱っていく感じがセリフで伝わって来る、というのが個人的に印象的でした。そこで、地の文でも、小木さんが弱ってる描写を付けたしてはいかがでしょうか？

こう、もうろうとした意識の中、飛田さんが『徐々に』状況を把握するって感じで。

そしてまた相変わらず、戦闘描写、情景描写が巧みですね！
辛口が、出来ない……！（笑）。

ただ、今回は『予告編』という感じで、キャラの深いところまで描写、とは行かなかったように思います。

でも、だからこそ『復讐』を掲げていながらそれに捕われていない、カラリとした主人公、というイメージが印象に残りますね。

強いて言うならば、前作のビートル1と飛田さんはどういう相性なんだろう？　と思います。

やっぱり、二人とも『突進・直感・自分の能力にあった動きで戦うコンビ』ってことでしょうか？

二人の勘（個性）が噛み合わないと悲惨な結果になりそうですが、今回のカマキリーは第一話でやられる敵キャラ（イメージw）なので、この二人のコンビの絆を書くには力不足のようです。

だからこそ、第二話が欲しいな〜！　なんて思いましたw

飛田さんはどういう感じのライダーになるのかなあ〜？　なんて妄想が書きたてられますね！

第二稿目

燃え盛る炎、舐め尽くす熱。散華した瓦礫の中で俺は目覚めた。爆発のせいで、ビルの一室の窓ガラスは全て割れ、夜の街の明かりが陽炎を纏い揺れている。

ここは……ぐっ！

両足に走る電撃のような激痛、朱にまみれた、辛うじてまだ脚の形を残す二本の肉が俺の下半身にくっついていていた。

これじゃ、もう空手は無理か……

うすらぼんやりとそんな事を考える。冷静に考えれば脚どころか、命さえわからないのだが。

「飛田！ 生きているか！」

声と共に俺を担ぎ上げる人影、メガネをかけた瘦身の男。

「小木……か？」

朦朧とする意識の中、俺は十年來の親友であり、優秀な科学者でもある男、小木の名を呟く。

「しっかりしろ！ こんな所で死なれちゃ困るんだ。お前、にはこのマスクドライバープラン一号機を着けて……もらわなくちゃ……ならないんだから……な」

小木の片手には小さな銀のアタッシューケースがあった。それを掴む小木の手が血に濡れている。やがてゆっくりと指から力が抜けていった。

「ああ、わかってるぜ。約束だからな……おい！ 小木！」

小木の横腹に血のシミが大きく広がっていく。明らかな銃創だ。

「……へっ、どうってこたあない。それより早く逃げ……」

黒い一団が俺と小木に立ちふさがる。装甲服とガスマスクを付けた、小銃の牙を持つ死の猟犬共だ。

こいつらっ！

「飛田、お前は逃げろ！」

アタッシューケースを握らせ、小木が俺を窓から投げ放つ。

「小木イイツ！」

「生きる飛田アッ！　そしてお前が、お前がステーキになるんだあッ！」

ビルから落ち行く俺が聞いた音は、友を貫く銃声。
俺が見た光景は舞い散る友の血霧。

そして俺が抱きしめた物は復讐のための牙。

二年後

関東地方都市、〇市郊外

叩きつけるような足音が路地裏の壁を叩く。

それは逃げていた。生存本能のため、恐怖のため、ただ街の片隅を逃げ続けていた。

よたつきながらも、その跳躍のような移動は人の速度を越えている。

ゴミ箱を踏み砕き、生ゴミをぶちまける。邪魔なスナックの古看板を真つ二つに切断、払いのけた。

恥も外分も 隠密性も機密性もない、全てをかなぐり捨てた逃走。それほどまでにそれは焦っていた。

「おい、待てよ」

雑居ビルの間、突如現れた前方の人影にその足が止まる。

「ずいぶん怯えてんなあ……化け物の分際で人間らしくよお」

蒸し暑い夜に似合う、Ｔシャツとジーパンのラフな格好の青年

飛田 直人 は冷酷な、獰猛な笑いを浮かべた。

ビル街のネオンに、その姿が照らされる。

二メートルを超える背丈と細長いシルエット。逆正三角形の頭部。鎌状に延びる、高周波振動を利用した切断能力を持つ両腕。重金属を含むエメラルド色の生体装甲。

カマキリの擬人化の失敗作としか表現出来ない外見。中途半端に

人間に近い様が嫌悪感をより引き立てる。

「才前ハ……何ダ!? ナゼ我ラ『クーゲルシュライバー』ヲ狙ウ
!」

その声は辛うじて人の言葉を話した。

「『なぜ』か……?」

飛田の掲げられた右手には二十センチ程の筒状の物体。対物ライフルの弾丸のような物があった。

「決まってんだろ……『復讐』だ!」

ビルからの落下から目覚めた時、飛田の前に一人の男がいた。

「おやおや、もう目覚めましたか。お丈夫ですねえ」

ニヤニヤと全てを嘲笑うように、笑顔を浮かべるその男は小木の協力者の二荒と名乗った。

飛田の脚はすでにサイバネティクス手術により機械の義足が取り付けられている。マスキドライダー一号機のセッティングも飛田用に済ませてあるという。まるで悪魔の如き手の回し用。

「さて、お膳立てはすみしましたので、肝心のあなたはいかがなさい
ますか?」

イヤミのように皮肉気に二荒が問う。飛田は迷う事無く、
復讐を選んだ。

「出番だ、ビートル1ツ！ 貫くぜ！」

めくり上げたTシャツの下にベルトのバックルが覗く。電子的紋様で刻まれるレリーフは、抽象化されたカブトムシの姿。

勢いよく、手に持つ筒 チヂリウム起爆用小型パイルバンカーを装着する。

カチリという小さな響きの後に、巨大な破裂音が唸る。濃縮チヂリウムの活性化した青い燐光が飛田を包み込む。

『チヂリウムエナジー制御、装甲展開開始』

ビートル1の音声 精神疲労を和らげやすいとされる柔らかな女性の声 が告げる。

光に包まれた飛田、その身が装甲に覆われていく。

光が晴れたその中に立っていた者は、

黒い装甲に、血脈の様に引かれる赤のライン。

額には、甲虫を想起させる小型の角。

複眼状の正六角型パターンの入ったゴーグル。

夜の街に、復讐の魔人が現れる。

「キイヤッ！！」

咆哮を上げ、カマキリの怪人が両手を振るう。空中を不可視の斬

撃波が疾駆する。

「セイツッ！」

それよりも速く、魔人は地を蹴る。斬撃波は魔人のいた背後の壁を切り裂くだけだ。

「ビートル1、ファイナルドライブセット、レディ！」

『チャージはもうやっている！ カウント、ワン！』

路地裏の狭い夜空に魔人が高く舞う。鈍く輝く三日月を背に、カマキリ目掛け落下。ベルトから左膝へ、青白い光が血液のように集っていく。

「気が効くなお前は！」

『集中しろ飛田、ツー！』

神の鉄槌の如く、左膝頭がカマキリの頭部に叩きつけられた刹那、

『スリー！ イグニッション！』

「ファイナルステークッッ！」

左膝が爆発音と共に眩い光を放つ。膝頭内部から、義足の膝部の内部骨格である金属支柱の槍　パイルバンカー　が撃ち出された。

魔人の持つ最強の牙は瞬く間にカマキリの頭部を貫き、吹き飛ばしていく。

その後、カマキリ体内の証拠抹消機能　つまり自爆装置が起動した。

「けっ、毎度派手に吹っ飛びやがる」

『出なければ証拠抹消機能の意味が無い』

爆発の中、無傷の魔人が立ち尽くす。

「俺が『何か』か、冥土の土産に教えてやるよカマキリ野郎」

それは、貫く者。それは、復讐者。それは挑戦者。汝、その名は、

「仮面ライダー　ステークだ」

飛田　直人とビートルの戦いはここから始まる。

第二稿目（後書き）

・作者からの一言

正直、この掲示板競作企画パイルバンカー『仮面ライダーステーク』はあまり手を加えてません。小木の負傷の描写を強めたぐらいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5037u/>

【企画】カッコいい戦闘シーンを書く練習

2011年9月25日03時27分発行